

ユニバーサルデザイン化と児童による評価の変化 —担任と児童への質問紙調査から—

山元 薫
(静岡大学教育学部)

KEY WORDS: ユニバーサルデザイン 学級づくり 生活づくり

【Ⅰ はじめに】

通常の学級における発達障害等のある特別な教育的ニーズのある児童生徒を包括する指導方法の開発を含め、教員の特別支援教育を充実させるための専門性の向上が急務となっている。そこで注目されているのがユニバーサルデザインの教育への活用である。本研究は、A 小学校におけるユニバーサルデザインの効果を担任の特別支援教育に関する理解度やユニバーサルデザインの実際と児童の評価の変化の関係を、静岡県総合教育センターの一フレットを基に作成した質問紙調査を通して明らかにしたものである。

【Ⅱ 方法】

(1)対象：A 小学校学級担任（6人）と全児童（約240人）

(2)質問項目

①担任用質問項目：生活づくりに関する項目（30項目）と授業づくりに関する項目（19項目）

生活づくりに関する質問項目：①「教室の整理・整とんを心掛け、教室に不要な物を置いていない」、②「前面黒板とその周りを整理・整とんしている」他

授業づくりに関する項目：①「児童の頑張りを認め、肯定的な表現で話しかけている」、②「指示などは言語だけでなく視覚的に提示するようにしている」他

②児童用質問項目：生活づくりに関する項目（18項目）と授業づくりに関する項目（11項目）

生活づくりに関する質問項目：①「教室は整理・整とんされている」、②「机の中やロッカーの使い方が学級で決まっている」、③「授業で使うファイルなどを置く場所が決まっている」、④「朝の会で、今日一日の予定を確認している」、⑤「今の座席は、授業に集中できる席である」他

授業づくりに関する質問項目：①「授業の中で「分かった」「できた」と思うときがある」、②「授業は楽しい」、③「授業中、先生の話聞くことができています」④「授業中、先生の話の内容が分かり、考えることができています」他

(3)手続き

①A 小学校教職員を対象としたユニバーサルデザインに関する校内研修（山元、2016）の実施と質問紙調査Ⅰを実施

②児童を対象とした第1回質問紙調査Ⅱ（X年1月）

③第1回の結果を受け、担任は強化項目をチェックリストから決め、手立てを考える

④手立てを中心に実践

⑤児童を対象とした第2回質問紙調査Ⅱ（X年3月）

⑥第2回のアンケートのフィードバック

【Ⅲ 結果】

(1)質問紙調査Ⅰ（学級担任対象）

学習面や行動面、コミュニケーション面で困難さのある児童生徒の増加について、「大いに感じている」4人「ある程度感じている」2人と、学級担任は特別支援教育対象の児童等の増加を実感している。また、発達障害に関する理解については、「ある程度理解している」5人「あまり理解していない」1人と、個人差はあるものの、学校としては

通級指導教室の教員や特別支援教育コーディネーターを中心に支援の必要な児童に対する指導改善を図ろうとしているところである。発達障害の特性に応じた指導方法についての理解では、「ある程度理解している」5人「あまり理解していない」1人であり、困っている状況は受け止めているものの、支援に至らないケースもある。これからの学級づくりや授業づくりにユニバーサルデザインが有効だと考えている担任は、「大いに感じている」2人、「ある程度感じている」2人、「あまり感じない」1人である。

(2)ユニバーサルデザインの実践と効果

①第1回質問紙調査Ⅱ（児童対象）結果（学校全体の傾向）

生活づくりでは、先生の話をよく聞く姿勢は身に付いている（83.1%）ものの、何か目標に向かって頑張っているといった高揚感をもって生活している児童が約69.5%と小学校とすると評価が低い印象を受けた。また、「教室の環境整備ができています」（77.0%）、「今の座席に集中できる」（約75.0%）、「時間までに着席し、授業の準備をしている」と回答している児童が75.0%と、学級環境や生活の仕方に課題があることが分かった。特に特別な支援を必要とする児童は、「できていない」と回答する率が高かった。

授業面では、約83.1%の児童が満足しているものの、「板書が見やすい」（81.9%）やICT等の視覚的支援の活用（71.3%）、児童が考える活動の設定（82.5%）と視覚支援や学び合いの場に関する課題が明らかになった。

②第2回質問紙調査Ⅱ（児童対象）結果（学校全体）

生活づくりチェック項目18項目のうち、13項目で評価が上昇した。また、授業づくりでは、授業づくりチェック項目11項目のうち9項目で評価が上昇した。特に各担任が意識して取り組んだ項目は、高い評価が得られた。

【Ⅳ考察】

A 小学校ではユニバーサルデザインの研修を行い学校全体で共通理解を図りながらユニバーサルデザイン化を進めた結果、各担任が学級の実情や発達段階に合わせ支援や指導を工夫し、全体的には児童評価の上昇を得ることができた。例えば、低学年では担任が前授業の終了時に次の授業の準備の指示を担任が出し特別な支援を要する児童は支援員が見届ける、高学年では児童同士で授業準備を促して、チャイム着席が可能になるように実施した。ユニバーサルデザイン化することで一定の効果を期待することはできるものの、各学級においては児童の教育的ニーズや学級の実情にあわせて実践することが大切である。あわせて、特別な支援を要する児童の中には、ユニバーサルデザインの視点での支援では生活のしにくさや学びにくさが解消されない児童もいることから、個々の困り感を把握し個別に対応する必要もあることが明らかになった。

山元薫(2016)：ユニバーサルデザインの具現化を目指す校内研修の効果、山元薫(2017)：ユニバーサルデザインを意識したせいかつづくり及び授業づくりの効果

(YAMAMOTO Kaoru)